

阿片を用いた日本の中国侵略

倉橋正直
愛知県立大学

Japanese invasion of China by use of opium

KURAHASHI Masanao
Aichi Prefectural University

キーワード **Keywords**: 日本の阿片政策 Japanese opium policy、けし栽培 poppy farming、阿片専売制 opium monopoly、世界の麻薬生産国 top the world in drug production、モルヒネ morphine、ヘロイン heroin

まえがき

今日、薬物汚染が世界的に問題になっている。日本もまた例外ではなく、すでにその害は軽視できない段階に到っている。その中で、北朝鮮で製造された大量の覚醒剤が中国東北地方を經由して日本にひそかに持ち込まれていることが、しばしば報道されるようになった。

日本の世論は、この問題が報道されるたびに、北朝鮮の無法な行為に対し、眉をひそめ嫌悪感をあらわにしている。その際、日本国民の多くは、日本が薬物汚染問題では被害者の立場にあるとだけ考えている。この問題では、日本をいわば無垢の少女のように考え、それが北朝鮮の覚醒剤によって、けがされようとしていると認識している。

そういった認識に問題があると私は考える。たしかに、現在、あるいは戦後の時期に限定すれば、日本は被害者である。しかし、戦前まで視野に入れれば、また、違った様相を呈してくる。その時、日本は恐るべき加害者であった。すなわち、日本は世界の麻薬生産国であって、阿片・モルヒネ・ヘロインなどの毒物を大量に、かつ長期間にわたって中国や朝鮮をはじめとするアジア諸国に密輸した。その結果、アジア諸国民ははかりしれない害毒を被った。日本はけがれない無垢の少女などでは決してない。その手はアジア諸国民の血で真っ赤に汚れている。

しかも、戦後の日本は、そういった恥ずべき行為を真摯に反省するどころか、ひたすら隠蔽し続けてきた。たとえ日本国民がきれいさっぱり忘れても、被害を受けたほうは決して忘れてはいない。たとえば、覚醒剤の生産や密輸をやめよという日本側の非難に対して、北朝鮮は次のように答えるであろう。

「私たちは、昔、貴国がやった行為をマネしているだけにすぎない。それも、貴国のやったのに比べ、ずっと小さい規模で。」と。

戦前、日本が行なった阿片政策を徹底的に調べる。その上で、アジア諸国民に心から謝罪する。こういった営みを経ることなしに、今後、彼らと心を開いて交流してゆくことはできないであろう。本稿がそ

ういった道程の、一つの礎になることを希望する。

【1】日本の阿片政策をめぐる研究状況

戦前の日本は中国に対して大規模な阿片政策を行なった。しかし、当時、すでに阿片に関する国際条約があり、しかも、日本はそれに加盟していた。だから、日本の阿片政策は国際条約に違反していた。そこで、条約違反を咎められるのを恐れ、日本は阿片に関することは、とにかく隠した。そのこともあって、戦前、日本の阿片政策に関する研究はほとんどなかった。戦後になっても、このテーマはなかなか研究者の関心と呼ばなかった。その中で、私は1984年から、このテーマの研究を始めた。そのきっかけは、別の研究テーマで、中国東北地方に関する日本語の調査報告書を多く読んだことからである。

中国側の抵抗で、当時、満州と呼んでいた中国東北地方に、日本人はなかなか入れなかった。しかし、その中で例外的に2種類の日本人、すなわち、売春婦とモルヒネの密売人が、かなり多数、入り込んでいた。この現象を見つけたので、この2種類の日本人のことを調べ始めた。研究を進める中で、前者は北方系からゆきさんの研究、後者は日本の阿片政策に発展していった。以来、20数年、この二つのテーマで研究してきた。

1984年当時、日本の阿片政策に関する研究は、日本だけでなく、中国でもなかった。中国側の研究においても、阿片というと、イギリスがインド産の阿片を中国に持ち込み、それが1840年の阿片戦争の原因になったことだけが取り上げられていた。1920年ごろから、大きな問題になる日本の阿片政策のことは、中国の研究者の目から抜け落ちていた。日本の阿片政策によって、ひどい目にあわされたはずの中国で、なぜか、この段階では、それに関する研究はほとんどなかった。不思議な話である。しかし、10年前ぐらいから、状況が変わり、阿片問題に関する研究が急に増えてくる。その背景に、現在の中国社会における各種の薬物汚染の深刻化があると推測される。要するに、現在の深刻な薬物汚染状況の、い